小学校音楽科の授業で必要とされる教師のピアノ技能に関する一考察

A study on the piano skills of primary school teachers needed for music class

長　島　　礼 *

Abstract

Teachers at primary schools are required to play keyboard instruments to perform the important role of accompanying their pupils when singing or playing an instrument in music class. Teachers who do not major in music are often unprepared for playing an instrument, and recent years have consequently seen an increase in the use of teaching CDs for music class. In light of this trend, the present study aimed to clarify the kinds of skills students of teacher-training university courses should be able to acquire in their piano lessons.

Although teacher-training courses are not expected to foster an exceptionally high level of piano skills, the present study found that students of these courses were only offered basic piano skills and did not learn how to accompany singing and instrumental music. Considering the level of ability of students enrolled in teacher-training courses, the possibility of these courses implementing piano lessons that target a higher level of skill, including playing a melody and singing at the same time as well as playing chords for a melody, should be examined.

キーワード：小学校音楽科教育　教師による伴奏と指導用 CD による伴奏

はじめに

小学校音楽科の授業の実態について、木村ら(2014)[1]が岡山県下の一部地域において現職教師を対象に行った調査では、音楽の授業における課題として次のような意見が述べられている。まず、学習の規律が整わず、規律を重んじると意欲がなくなるし声も小さくなる、逆に解放しすぎると何の授業なのかわからなくなる、といった授業を始める以前の社会的行動の確立に関する課題、次に、教材選択や目的が明確でないために「ただ歌ってみました」というような授業になる、といった教師の授業構成力に関する課題、そして、教師自身が、評価方法がわからない、どのような歌い方が良い歌い方なのかわからない、曲への理解ができないので指導もできているのかわからない、といった教師の音楽的な知識や技能の不足に関する課題である。さらにはこれらを相談できる音楽の得意な教員が周囲にいないといった課題もあり、音楽を専科としないクラス担任が音楽の授業を展開する上での困難感が見受けられる。

本稿では、これらの課題を解決していく為の一助として、教師の音楽的な知識や技能の不足に関する課題、特に教師のピアノ実技、歌唱や器楽合奏時の伴奏の技能に関する課題に焦点を当てる。具体的には、教員養成課程のある大学に所属する学生の音楽的能力の向上が、後には現職教師の音楽的能力の向上に繋がることを鑑み、実際の小学校の音楽の授業で必要とされるピアノ実技の技能を押さえた上で、最終的には教員養成課程に設置されている実技関連の授業のあり方について検討していく。なお、教育系学部に所属する学生のピアノ実技の授業に関する

* Rei NAGASHIMA　教育学部准教授

1）木村みどり　古寺有希（2014）「小学校における音楽の授業に関する報告―音楽の授業の指導について―」美作大学・美作大学短期大学部紀要　Vol. 59　pp. 113-128

研究としては、深井（2007）[2]や森村（2014）[3]の研究があるものの、この分野における研究が充分になされているとは言い難い。

まず、教員養成課程を有する大学においてピアノ実技の授業が設置されている理由についておさえておきたい。教育職員免許法執行規則第3条及び第6条によると、小学校教諭1種免許状の取得条件は、「教科に関する科目」と「指導法に関する科目」を修得することとなっている。実技に関する科目は「教科に関する科目」に相当し、「指導法に関する科目」である音楽科教育法とともに、小学校音楽科の授業を実践するにあたり必要となる音楽の基礎知識や技能を修得する場となる。授業で扱われる楽器については、教員免許状の規定ではピアノでなければならない旨の指定は特にされていないが、各県の教員採用試験でピアノ演奏が課される場合が多く、また、これまで実際の小学校音楽科の授業においても伴奏楽器としてオルガンやピアノが使われてきた経緯から、必然的にピアノが取り入れられている。さらに、学生が音楽の基礎的要素を学ぶツールとしても、ピアノは適当だと考えられており（深井、2007）[4]、その理由として、①音がすでに作られており扱いやすい、②音楽を構成する様々な要素を説明するにあたり利便性に優れている、③音色や強弱など多彩な表現力を持ち1台で旋律も伴奏もできる、というように幅広い用途に対応できる点が挙げられる。いずれにせよ教員養成課程を有する大学の実技に関する授業では、学生のピアノ技能の向上、および、ピアノ実技を通して音楽の基礎的能力を養うことが目的となっている。

1．伴奏楽器としての鍵盤楽器の役割（オルガンやピアノ）

小学校の音楽の授業において教師が弾く鍵盤楽器が最も活躍する場面は、歌唱や器楽の伴奏をする時である。そこで本項では、声楽曲に伴奏がつくようになった歴史的経緯や伴奏の意義や効果を示すとともに、実際の小学校音楽科の授業での伴奏のあり様についても整理し、その相違を明らかにしつつ課題となっている事柄について検討していく。

（1）声楽曲における伴奏の意義と効果

文部省（1955）[5]によると、近代和声学が確立された1700年代ごろ以後の声楽曲には原則として伴奏が不可欠であると考えられるようになり、その原因として、

①不安定、不正確になりやすい人声による音楽表現に、器楽的な正確な高度を示す必要があること
②音楽の発達に伴い、旋律だけでは物足りなく感じられるようになったこと
③音楽の基盤となす和声は、四重音が最良と考えられるようになったこと
④各種の楽器が急速に進歩発達したことによって伴奏の必要性が認識されるようになったこと

の4点が挙げられる、と記されている。

また、伴奏の弾き方とその注意について[6]では、

①伴奏の役割を自覚し、歌唱表現を最良の状態に導くのを本義とする
②部分的な正確さよりも全体的な効果をねらう
③作者の意図を生かした演奏をする
④適当な速度と表情および、正しいリズムで演奏する
⑤ペダリングやフレージングに注意して演奏する

といった内容が示されており、伴奏には、歌唱部だけでは表現しつくせない部分を補い助ける役割があり、歌唱音を浮き出させ、音楽的背景を描くのが任務である、と記されている。つまり、歌い手を誘導する立場にあるのではなく、あくまでも歌い手の個性や声の質、息遣いなどを感じ取り、歌唱を生かす柔軟な伴奏が求められる、ということである。

伴奏楽器として、鍵盤楽器の他に弦楽合奏・管弦楽なども用いられる、としている。

2）深井尚子（2007）「教育系大学音楽科におけるピアノ指導法の研究」北海道教育大学　人文科学・社会科学編　第22巻　第2号 pp. 205-218
3）森村祐子（2014）「小学校教員に求められる音楽的資質―ピアノ技能の習得について―」東京家政大学研究紀要第54集（1）pp. 24-34
4）前掲 p. 206
5）文部省編著（1955）『小学校学習指導書　音楽科　輪唱・合唱編』教育出版株式会社 pp. 79-93
6）同上 p. 94

（2）小学校音楽科の授業における伴奏の実際について

近年の小学校音楽用指導書[7]には、指導書実践編、指導書研究編、指導書伴奏編と共に、指導用CD、鑑賞用CD、音楽授業支援DVD、がセットになっており、特に指導用CDには、教科書に掲載されている楽曲について、以下の形態（1曲に対し複数種）の音源が収録されている。

- ・歌唱　児童合唱団による合唱
- ・歌唱・器楽　児童合唱団とアンサンブルグループによる演奏
- ・カラピアノ　ピアノによる伴奏
- ・カラオケ　オーケストラによる伴奏
- ・階名唱　児童合唱団による合唱
- ・階名唱と器楽　児童合唱団とアンサンブルグループによる演奏

また、CDに添付されている解説書には、曲名、1曲の所要時間、作詞・作曲者名、演奏者名、のみならず、拍子記号、前奏・間奏・後奏の小節数について記載されており、使用しやすいよう工夫された内容となっている。そしてその影響を受けてか、最近では、教育現場において指導用CDを用いた授業が実践されることが多く、教師が実際に子どもたちの前でオルガンやピアノといった鍵盤楽器を演奏する機会が少なくなっていることを耳にする。そこで、前述の木村ら（2014）[8]の調査で示された現職教師の意見を参考に、実際の音楽科の授業にて、教師による鍵盤楽器を使用した伴奏と指導用CDを使用した伴奏を用いた場合の、各々のメリットとデメリットを明らかにする。

○　教師による鍵盤楽器を使用した伴奏におけるメリットとデメリット

【メリット】
- ・テンポを変えられる
- ・流れを止めずに授業を進められる
- ・正しい音（音高）を身に付けたい時に、ピアノで音とりができる
- ・必要な部分を繰り返し聴くことができる

【デメリット】
- ・ほとんど子どもと同レベルで、鍵盤ハーモニカの見本くらいしかできない
- ・苦手だからスムーズにできない
- ・弾けたら楽しいと思うが、練習時間がない
- ・子どもの顔をみて歌わないと子どもがついてこない

○　指導用CDを使用した伴奏におけるメリットとデメリット

【メリット】
- ・教科書に掲載されている楽曲についてはCDがあるため便利である
- ・子どもの様子を把握しやすい

【デメリット】
- ・CD一辺倒だと子どもがのりきれない
- ・CDに収録されていない曲をしたいときに困る
- ・正しい音（音高）を身に付けたい時に、音取りができない

つまり音楽の授業で教師が鍵盤楽器による伴奏をするメリットは、児童に正しい音程を示すために必要な箇所のメロディーを繰り返し弾いて示せること、そしてスムーズな流れで授業が展開できることだといえる。この点については、『小学校音楽用指導書　小学生のおんがく1　研究編』でも以下のように述べられており、教師が適宜旋律を弾き、児童に旋律を聴かせることができることは、授業を進める上で欠かせない技能であるといえる。

> 指導者による伴奏は、目の前の子どもたちの状況をつかみながら自在に対応できるのが特徴です。フレーズごとに旋律を繰り返し歌って覚える、音程やリズムが曖昧なところは部分的に取り出して歌う、状況によって速度を変えて歌う、などといった臨機応変な伴奏は、あらかじめ録音されているCDなどでは望めません。（中略）一般に簡易伴奏は単に「易しく弾くためのもの」というように考えがちですが、それだけではありません。例えば旋律つきの簡易伴奏は、子どもたちが初めてその曲の旋律を覚え

7）小原光一　他12名（2011）『小学校音楽用指導書』教育芸術社
8）木村みどり　古寺有希（2014）「小学校における音楽の授業に関する報告―音楽の授業の指導について―」美作大学・美作大学短期大学部紀要　Vol.59　pp.113-128

るときのなどのガイドメロディーとしても活用できます。　（小原光一他、2011、p.39）

一方で、指導用CDを用いた授業では、子どもの様子がよく観察できる、という意見が挙がっている。ピアノ伴奏（或いは弾き歌い）をしながらクラスの児童の様子を把握することが至難の業であることは想像に難く、今後、指導用CDを用いた授業のあり方も見込めそうである。指導用CDによる伴奏については、『小学校音楽用指導書　小学生のおんがく１　研究編』にて以下のように述べられており、プロの演奏をバックに歌唱や器楽演奏を行うことによって、曲想をつかむ力や音楽の構成要素への理解を深めることができる、としている。

いずれにしても、いわゆるカラオケですから、指導者が演奏するオルガンやピアノの伴奏と違って、柔軟な対応をしてくれる伴奏は望めません。そのかわり、豊かな音色をバックにたいへん気持ちよく歌うことができます。多彩な音色と豊かな響きをもった指導用CDに合わせて歌うことを通して、知らず知らずのうちに子どもたちのリズムや和声に対する感覚も育てていくことができます。

（小原光一他、2011、p.39）

木村らの実態調査では、このような編著者の意図するところを汲み取った意見は見受けられず、利便性を第一に活用されている様子が推測されるが、音楽的能力を養い、向上させるためのツールとしての指導用CDの活用法を検討し、意図をふまえた上で使用したいものである。また注目すべきは、子ども達が「顔をみて歌わないとついてこない」し「CD一辺倒では授業にのってこない」という意見である。これについては、大畑（1997）[9]が、「音楽のあり方として、技術の上手下手よりも音楽を媒体とした『気持ちのやりとり』が大切で、人と人とのよりよい関係のために音楽が生かされていることが重要だ」と述べているように、そこにいる教師（担任）とクラスの仲間だからこそ創ることのできる音楽の時間というものがあるはずである。指導用CDの音楽は、誰がCDラジカセのボタンを押しても同じように聴くことができる。よって、そのCDをどのように活用するか、というところが教師の腕の見せどころとなる。これらを考慮し用いることによって授業の質が高まることを期待する。

（3）伴奏楽器としての鍵盤楽器の役割と音楽科の授業における伴奏の実際

歌唱や器楽演奏に伴奏がつくようになった歴史的経緯をみると、鍵盤楽器によって正確な高度を示すことや、物足りなく感じられる旋律に音楽の基盤となす四重音を加える効果、そして、楽器が急速に進歩発達したことによる伴奏の必要性などが示されており、正確な音高を示すことと豊かな響きを求めて伴奏がつくようになったと考えられる。これを、実際に音楽の授業を展開する教師のピアノ技能と照らし合わせると、当然のことながら教師のピアノ技能は高いに越したことはないといえるが、最低限必要なピアノの技能としては、楽曲の旋律が弾けること、そして旋律だけでは物足りない和音の響きを加えられること、だといえる。また、音楽専科でない教師が音楽の授業を実践していることをふまえると、今後、指導用CDの効果的な用い方についても検討していく必要があり、より質の高い音楽の授業を構成する上で、その用い方を吟味して使用するべきであると考える。

２．教員養成課程に所属する学生の、ピアノ実技の授業の実際

前項では、小学校音楽科の授業を実践するにあたって、教師のピアノ技能は高いにこしたことはないが、と前置きをしつつも、最低限必要なピアノの技能として、楽曲の旋律が弾けることと、旋律に和音を加え響きの豊かな音楽を奏でられること、であるという結果が示された。これを踏まえ、本項では教員養成課程に所属する学生のピアノ実技の授業の実際とその成果を示しながら、限られた授業期間で学生が前述の技能を修得することが可能であるのか否かを明らかにしていきたい。具体的には、本学の「音楽Ⅰ（器楽）」の授業の１回目と８回目の学生の学修状況を比較することによって、その成果を評価し、より充実した授業を検討する手立てとしたい。

9）大畑祥子編著（1997）『保育内容　音楽表現の探求』相川書房 p.114

（1）「音楽Ⅰ（器楽）」の授業について

本学では ML 教室（Music Lab）を使用してピアノ実技の授業を実施している。履修学年は２年生で、授業期間は半期、１回の授業時間は90分、教員１名に対する学生数は20名程度である。１学年を８クラスに分け、学生は春学期か秋学期のいずれかに履修することとなる。本稿では今年度春学期に開講している３クラス（57名）の授業を検討対象とする。

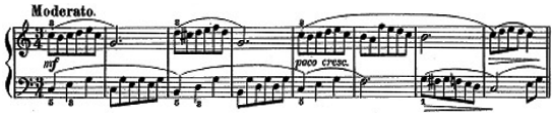
（2）学生のピアノの実技経験について

授業開始までの事前調査によって履修者（学生）のピアノ実技の経験を調べたところ、次のような結果であった。自己申告のため人数に多少の誤差が生じると思われるが、履修者の半数以上を初心者が占めていることになる。

これまでにピアノを習ったことがある者		24名
内訳	経験年数10年以上の者	６名
	経験年数３年程度から10年程度の者	14名
	経験年数１年程度から３年程度の者	４名
これまでにピアノを習ったことのない者		33名

さらに、全音楽譜出版社『標準バイエル教則本・併用曲付』より77番を提示し（楽譜１参照）、「初見で弾ける」「練習すれば弾ける」「弾けない」の三択で弾けるかどうか補足質問したところ、経験年数10年以上の６名は「初見で弾ける」と回答し、経験年数３年程度から10年程度の14名は「練習すれば弾ける」と回答し、経験年数１年程度から３年程度の４名は「弾けない」と回答した。また、習ったことのない33名に関しては、全員が「弾けない」と回答している。

これらをふまえると、３クラス合計57名の履修者のうち、授業内容に対し余裕をもって取り組める学生が６名、適宜指導を受けながら受講できる学生が14名、丁寧な、あるいは非常に丁寧な指導を必要とする学生が37名ということになる。よって１クラスあたり19名の学生のうち、12、13名に丁寧な、あるいは非常に丁寧な指導が必要だということになる。



楽譜１

（3）使用テキストと授業進行表について

授業では、大学音楽教育研究グループ編『２訂版歌唱教材伴奏法　バイエルとチェルニーによる』（教育芸術社、2015、全128p）、および、初等科音楽教育研究会編『小学校音楽教育法』（音楽之友社、2009、全255p）の２冊のテキストを中心に、主要三和音および属七の和音に特化した、左手和音進行練習用プリント教材[10]や、小学１、２年生の音楽の教科書に掲載されている歌（和音伴奏付き）のプリント教材[11]を使用している。また ML 教室における授業では、学生にある程度の自主性が求められるため、初回授業にて授業14回分の進行表を配布し、各自進行表にそって課題を進めていくよう指示している。授業進行についての概要は以下の通りである。学生は、１回の授業にて、左手の和音進行の練習、弾き歌い、ピアノ曲の各項目から１曲ずつ、計３種の課題に取り組むこととなる。

なお、複数の担当者によって開講される授業であるため、ある程度同一内容で授業を進められるよう、担当教員間で認識の統一を図っている。

○　主要三和音および属七の和音の、左手和音進行練習用プリント教材の進め方

以下の順で和音進行の練習に取り組む。

Ⅰ－Ⅴ－Ⅰ　→　Ⅰ－$Ⅴ_7$－Ⅰ　→　Ⅰ－Ⅳ－Ⅰ
→　Ⅰ－Ⅳ―Ⅴ－Ⅰ　→　Ⅰ－Ⅳ－$Ⅴ_7$－Ⅰ　→
Ⅰ－Ⅳ―Ⅰ－Ⅴ－Ⅰ　→　Ⅰ－Ⅳ－Ⅰ－$Ⅴ_7$－Ⅰ

○　弾き歌いの進め方（小学１、２年生の音楽の教科書に掲載されている歌、および、歌唱共通教材）

教科書掲載曲の選曲に関しては、前述の左手和音進行の練習用プリント教材に対応する曲を選曲している。また、歌唱共通教材については初心者用伴奏教材および簡易伴奏譜も可としている。以下の曲を順次進める。

10）ハ長調、ト長調、ニ長調、ヘ長調、変ロ長調、イ短調の主要三和音と属七の和音に特化した、左手の和音進行を練習するためのプリント教材

11）「どんぐりさんのおうち」「ちょうちょう」「小ぎつね」「うれしいひなまつり」「お正月」「しろくまのジェンカ」など。左手和音進行のプリント教材で練習した和音進行で演奏できるよう可能な限り両者を対応させている。

「どんぐりさんのおうち」→「ちょうちょう」→「小ぎつね」→「うれしいひなまつり」→「お正月」→「しろくまのジェンカ」→「うみ」→「かたつむり」→「春がきた」→「夕やけこやけ」→「虫のこえ」→「茶つみ」→「春の小川」→

以降は、各自の進度に応じて歌唱共通教材を順次進める。

○　ピアノテキストの進め方（使用テキスト『２訂版歌唱教材伴奏法　バイエルとチェルニーによる』）以下の曲を順次進める。

【ハ長調のⅠ・Ⅴによる和音伴奏：2、3、4、7、8、9、11、12番】→

【ハ長調のⅠ・Ⅴ・V_7による伴奏型(1)：16番】→

【ハ長調のⅠ・Ⅴ・V_7による伴奏型(2)：18、20番】→

【ハ長調のⅠ・Ⅴ・V_7による伴奏型(3)：22番】→

【ハ長調のⅠ・Ⅴ・V_7による伴奏型(4)：27番】→

【右手の八分音符：28番】→【左手の八分音符：30番】→

【両手の八分音符：31番】→

【ト長調の音階とⅠ・Ⅴ・V_7による和音伴奏：33、35番】→

【ト長調によるⅠ・Ⅴ・V_7による伴奏型(1)：36、37番】→

【ト長調のⅠ・Ⅴ・V_7による伴奏型(2)：39番】→

【ヘ長調の音階とⅠ・Ⅴ・V_7による和音伴奏：40、42番】→

【ヘ長調のⅠ・Ⅴ・V_7による伴奏型(1)：43、44番】→

【ヘ長調のⅠ・Ⅴ・V_7による伴奏型(2)：45、47番】→

【付点のリズムと移調：48番】以降は、各自の進度に応じて進める。

（４）「音楽Ⅰ（器楽）」授業の成果について

本学のピアノ実技の授業である「音楽Ⅰ（器楽）」では、８回目の授業で中間テストを実施している。１回目から８回目までの計８回（全14回）の授業を経て、学生のピアノ技能の成果について整理したものが表１である。特に、授業開始時に楽譜１の楽曲を自力で弾けないと答えている学生に注目すると、授業が８回終了した時点での彼らの進度は、最も遅い学生で、ピアノ曲が４番、弾き歌いが「ちょうちょう」、最も進度の速い学生で、ピアノ曲が51番、弾き歌いが「春がきた」であった。初心者であると申告した学生でも、容易な曲であれば、歌詞を歌いながら旋律を弾き、和音伴奏ができる状態にまで到達できることがわかった。

なお資料１は、学生達が中間試験で演奏したピアノ曲の一部である。

まとめ

本稿では、教員養成課程のある大学に所属する学生の音楽的能力の向上が、後には現職教師の音楽的能力の向上に繋がることを鑑み、実際の小学校の音楽の授業で必要とされるピアノ実技の技能を押さえた上で、最終的には教員養成課程に設置されている実技関連の授業のあり方について検討することを目的としている。 結論としては、教育系学部に所属する学生、特にピアノ初心者の学生達が、限られた授業期間の中でその技能を修得することは可能である、ということを示すことができた。大学でのピアノ実技の学習を徹底させることで、将来、小学校教員として音楽の授業で児童の前に立った時、安易に指導用 CD の存在に逃げる姿勢を改められるのではないかと期待したい。また、大学でのピアノ実技の授業における練習過程では、調性、拍子、音名、音価、リズムなどの理解が不可欠であるし、１曲仕上がるごとに動きの悪かった指が動くようになっていく様を目の当たりにした。学生自身も、自分自身の変容（理解できたり指が動くようになること）に素直に喜びを表していた。音名を読むことや指使いに気を配ること、左手に関しては和音だけでなく分散和音へ変化させていくなど課題は尽きず、また、授業では譜読みができて弾けるようになることで精一杯の感はあるが、それらは次の課題として心に留めつつ、まずは「やればできる」ことを実感する経験を沢山積んで、子ども達の歌声や合奏に伴奏をすることへの垣根が少しでも低くなればと考えている。

表１．授業８回目における学生のピアノ技能の状況

授業開始時の状況			８回目の授業の状況	
学生番号	ピアノ実技の経験年数(年)	自己評価※	中間試験で演奏したピアノ曲(番)	中間試験で演奏した弾き歌い曲
1	15	○	72	春がきた
2	14	○	83	ふるさと
3	12	○	69	春がきた
4	12	○	51	かたつむり
5	9	○	65	春がきた
6	9	○	59	しろくまのジェンカ
7	13	△	76	春がきた
8	13	△	16	お正月
9	10	△	28	うれしいひなまつり
10	9	△	12	しろくまのジェンカ
11	7	△	48	うれしいひなまつり
12	7	△	51	しろくまのジェンカ
13	6	△	73	うみ
14	6	△	12	お正月
15	5	△	48	うれしいひなまつり
16	5	△	12	お正月
17	5	△	12	お正月
18	4	△	61	春がきた
19	3	△	11	うれしいひなまつり
20	3	△	51	かたつむり
21	1	×	12	お正月
22	1	×	11	お正月
23	1	×	36	うれしいひなまつり
24	1年未満	×	51	うみ
25	0	×	9	ちょうちょう
26	0	×	20	うれしいひなまつり
27	0	×	4	小ぎつね
28	0	×	4	小ぎつね
29	0	×	6	ちょうちょう
30	0	×	9	小ぎつね
31	0	×	9	小ぎつね
32	0	×	6	小ぎつね
33	0	×	7	ちょうちょう
34	0	×	7	小ぎつね
35	0	×	4	ちょうちょう
36	0	×	31	お正月
37	0	×	18	お正月
38	0	×	31	かたつむり
39	0	×	50	春がきた
40	0	×	31	うれしいひなまつり
41	0	×	31	お正月
42	0	×	31	うれしいひなまつり
43	0	×	11	ちょうちょう
44	0	×	18	小ぎつね
45	0	×	51	かたつむり
46	0	×	11	小ぎつね
47	0	×	18	小ぎつね
48	0	×	11	お正月
49	0	×	12	お正月
50	0	×	12	小ぎつね
51	0	×	12	お正月
52	0	×	10	ちょうちょう
53	0	×	12	小ぎつね
54	0	×	12	お正月
55	0	×	9	お正月
56	0	×	11	お正月
57	0	×	9	どんぐりさんのおうち

※楽譜１を演奏するにあたり、どの程度の練習が必要か自己評価したもの
○…「初見で弾ける」　△…「練習したら弾ける」　×…「弾けない」

【参考文献】

石原慎司（2016）「小学校教員養成課程の教育システムに関する今日的課題―音楽家教育に関る政策と学生の実態から―」秋田大学教養基礎教育研究年報 pp. 33-43

久保田慶一（2017）『2018年問題とこれからの音楽教育』ヤマハミュージックメディア

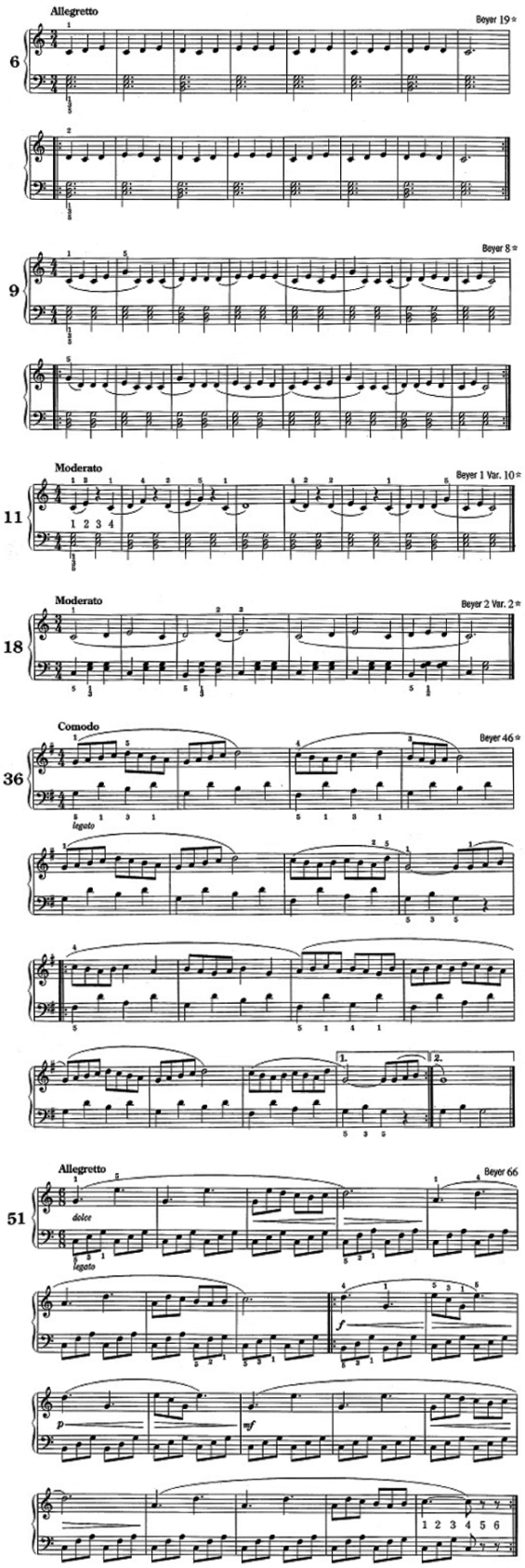
菅野恵理子（2015）『ハーバード大学は『音楽』で人を育てる』㈱アルティスパブリッシング

芳賀均　布施美砂子　久保允十（2016）「教員養成『小学校音楽家教育法』の授業に関する考察」北海道教育大学紀要　教育科学編67（1）pp. 359-376

畠澤郎（2007）「学校音楽の課題と展望」鹿児島大学教育学部研究紀要　教育科学編 pp. 1-10

平井李枝（2016）「教員養成課程学生に対するピアノ『弾き歌い』指導法の研究」宇都宮大学教育学部実践紀要第２号 pp. 91-98

文部省（1955）『小学校学習指導書　音楽科　輪唱・合唱編』教育出版株式会社



資料１．中間試験で演奏されたピアノ曲の楽譜（一部）